

ながいの水・緑・花

吾妻連峰に発した母なる川、最上川は、米沢盆地を北流し、やがて、小規模な狭窄部の通称「伊佐沢峡」から長井盆地に入ります。その狭窄部の出口で磐梯朝日国立公園の一角をなす、飯豊連峰から発した白川が左岸側に合流すると、最上川は一気に豊かな流れとなります。

以前は、ここから下流を最上川と呼んだことから、合流地点に「最上川発祥の地」の石碑を設け、最上川ビューポイントの一つになっています。さらに、南北に細長く伸びた長井盆地を、北流する最上川に沿うように市街地が広がり、かつては、最上川舟運の舟着場が設けられ、米沢藩の表玄関として繁栄しました。そして、朝日連峰を水源とする野川が西方より流れ、分水された清涼な水が市街地を縦横に走り、台所の一角に川の水を引き込んだ洗い場「入れかわど」などをはじめ、生活用水や遊水機能を持たせ、洪水対策にも利用されてきました。

このように、飯豊連峰や朝日連峰から流れ出た河川が、長井で母なる川、最上川に合流していま

す。まさに、水質の良さだけでなく地理的特性からも水の長井と称される由縁です。

さらに、磐梯朝日国立公園の一角を占める野川源流域や、通称「西山」で親しまれている葉山連山をはじめ、長井盆地周辺の山々は、花崗岩質の古い岩盤からなり、緑豊かな森を形成しています。盆地の東側には平成元年に制定された市の条例による「不伐の森」を設け、緑を育てています。また、市街地郊外の豊かな水田地帯には、数十本の杉の大木で囲まれた屋敷群が見事な散居集落を形成しています。

国の天然記念物に指定されている伊佐沢の久保ザクラや草岡の大明神ザクラをはじめ、最上川堤防千本桜、あやめ公園、白つつじ公園、はぎ公園、梅花藻など、四季折々に花々が咲き誇る郷になっています。平成12年にはせせらぎ緑道が甦る水100選、三階滝の湧水が山形県里の湧水100選に選ばれています。このように、水と緑と花に恵まれ、長年育んできた長井は、平成8年に全国水の郷百選にも選ばれています。

1 河川

1 最上川

西吾妻連峰に源流を発し、ほぼ一貫して北流したのち、新庄盆地で西に流れを変え、酒田で日本海に注ぎ、県内だけを流れる母なる川として親しまれてきました。米沢市大平地区の近くにある、火焰滝を源流としたときの河川長は229kmで、国内の一級河川の中で7番目。流域面積は同じく9番目の7,040km²であり、県土面積の76%を占めています。さらに、流域人口は県総人口の80%余りになります。周囲の山々は、全国でも有数の豪雪地帯なので、水量が豊富で全国屈指の流量を誇ります。このことから、古くより舟運が栄え、地域の経済文化を育んできました。

流程のほとんどが上中流的景観をなし、庄内平野に入って日本海までの30kmほどの区間が、よう

やく下流らしい景観になります。このように、盆地と狭窄部が数多く連なり、難所の多い河川であることから、日本三大急流のひとつに数えられて

きました。水質においても、途中の狭窄部で自浄作用が働き、中下流部が良好な傾向にある珍しい河川となっています。最上川が流れる長井の市街地は、上流部における中核都市になっています。



2 おきたましらかわ 置賜白川（白川）

飯豊連峰の主峰である飯豊山の南東側に連座する、種時山に源流を発生し、ほぼ一貫して北東方向に流れ、長井市豊田地内で最上川左岸に合流します。市民の多くは、ここから下流を最上川、上流を松川とよんできましたが、今では松川も含めて最上川と称しています。白川の長さは42.4km、流域面積は322.8km²あり、最上川上流域では最大の支川になっています。したがって、白川の合流により最上川の流域面積が急増し、東北の大河らしい様相に変わります。

途中の中津川須郷付近で広河原川を合わせた後、昭和56年に竣工した白川ダムに入ります。なお、広河原川上流には広河原温泉が湧出しています。地質は源流域が花崗岩、石英安山岩、石英粗面岩などからなり、中流域は第三系の凝灰岩、砂岩、頁岩から、下流域は長井盆地を構成する扇状地と第四系の砂礫粘土層で構成され、水質も比較的良好に保たれています。



3 おきたまのがわ 置賜野川（野川）

朝日連峰の南斜面をなす平岩山に源流を発生し、急落を繰り返す急流となっています。20kmほど南下すると、熊野山の北麓（石淵）で進路を北東に急変し、やがて、長井市街地で最上川左岸に合流します。河川の長さは22.65km、流域面積は125.3km²と小規模な河川ですが、古来より大雨のたびに氾濫し、暴れ川として恐れられてきました。近年は治水、利水、発電目的で管野ダムや木地山ダムが相次いで建設され、平成23年に管野ダムを水没させる形で、より大規模な長井ダムが完成しました。

朝日連峰の花崗岩を洗う流れは、谷の深い野川溪谷としても知られ、とくに三淵の景観は見事です。さらに、上流に人家がないことから水質はきわめて良好で、県下でも有数の清流となっています。長井市では、その伏流水を汲み上げて水道に利用しています。



【野川溪谷・三淵】

2 滝・湖・沼

1 ふどうたき 不動滝（三階滝）

長井市寺泉地内の五所神社より北西方向の不動沢に3～4km分け入った、海拔約450mに位置します。春には、葉山連山の一角より流れ出た豊富な雪解け水が、落差約15mで豪快に落ち込み、その迫力に思わず圧倒され、心魂まで洗われます。三段に落下する様子から、別名「三階滝」ともよばれています。

また、不動明王の鎮座する聖地であり、朝日岳につながる修験の道でもありました。周辺は深山幽谷の雰囲気を感じ出しており、神秘的なパワースポットです。新緑や紅葉の季節はもちろん、四季折々に楽しめる場所です。

2 ひやくしゅうこ ながい百秋湖

平成23年に竣工した長井ダムのダム湖の名称です。地名の「ながい」と、朝日山系の山々の紅葉が水面に映え、いくつもの素晴らしい景観を満喫できるイメージの「百秋」という言葉を繋げてつくられました。また、「百秋」は、古事記の中の「豊葦原之千秋長五百秋之水穂国」を引用しています。

また、竜神大橋から見る百秋湖の景観は山形景観物語に登録された山形県を代表する素晴らしい景観です。

3 中里堤 なかざとつみ

西根草岡地内の古代の丘、縄文村の一角にある農業用溜池で、古くは江戸時代に築堤されたといわれています。湖面は台形に近い形状をしており、湖岸周囲の長さは約500m、湖表面積は約13,000㎡となっています。

周辺には、遺跡の資料館や復元された竪穴住居^{たてあなじゆうきょ}、さらに、バンガローや体験交流センター、蕎麦屋などが整備されており、長井盆地を一望できることもあって、市民の散策に利用されています。



4 大石沼 おおいしぬま

上伊佐沢大石地内にあり、白鷹山地の支脈をなす東山丘陵地の一角、松葉沢山の東側斜面に湛水^{たんすい}した、湖面標高530mの小湖沼です。その長径は約150m、南北方向の短径は約50m、湖表面積は約7,300㎡で、周囲の森は、平成元年に長井市不伐の森条例を制定し、永久保存されています。中には、長井市の天然記念物に指定されているモミジも見られます。

また、湖を越流^{さかさかわ}した水は伊佐沢地内を貫流して、最上川右岸に注ぐ逆川の源流にもなっています。

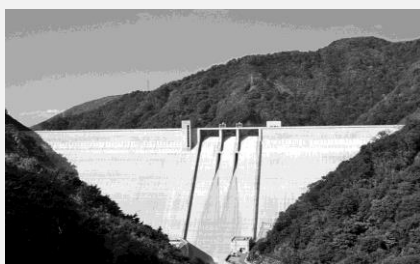


3 ダム

1 長井ダム

昭和42年8月に発生した集中豪雨は、最上川上流域や荒川、胎内川を中心に、甚大な被害をもたらしました。これを契機に、最上川水系河川整備計画が見直され、白川、野川のダム建設が計画されました。長井ダムは、管野ダムを水没させる形で、より大規模なダム建設が計画され、国土交通省の直轄ダムとして平成23年に竣工しました。

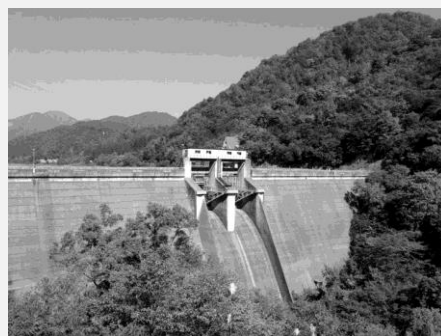
形式は重力式コンクリートダムで、堤体の高さは125.5m、長さ381m、総貯水容量5,100万tで県内屈指の規模を誇り、洪水調節流量が管野ダムの毎秒225㎥から、長井ダムの毎秒780㎥に大幅に増加しました。そのほかにも、農業用水、水道用水、水力発電、野川の流量維持などの役割を持つ多目的ダムです。



2 木地山ダム

野川本流の上流部に洪水調節、発電、農業用水の目的で建設され、昭和35年に竣工した県営ダムです。堤体の高さは46m、長さ168.2mと小規模ですが、中空重力式コンクリート式とよばれる珍しいダムで、県内には蔵王ダムと2カ所しかありません。

清涼な水を湛えたダム湖は、東北のマッターホルンと称される祝瓶山^{いわいがめやま}の山容が映る絶景ポイントです。また、湖水は野川第二発電所に導水されて発電に供されています。



4 長井フットパス

1 長井フットパスのはじまり

長井市のフットパスは、平成14年に国土交通省のフットパスモデル地区として選定され、翌15年度から白川ルート of 整備に着手したのが始まりです。

その後、最上川下流域の市街地までのフットパスとして、川沿いルートとまちなかのルートを検討するため、市民13名によるワークショップ「フットパス推進会議」が発足。勉強会や検討会を重ね、フットパスルートの選定のほか、案内標識やガイドマップのデザインの検討、さらにホームページの制作や運営など、それぞれの得意分野で持ち味を発揮し、平成15年には、その集大成としてガイドマップ「みずはの小道」を発行しました。

長井市のフットパスは官民が協力して整備しています。

2 まちなか水路

「長井」の地名由来は、水の集まるところを意味し、文字どおり川が多く流れています。

まちなかには、いたるところに水路があり、清らかな風景が楽しめます。初夏から初秋にかけて清流には、「梅花藻」が白くかわいい花を咲かせます。

また、平行水路、交差水路、家に入り込む水路など珍しい水路が多く、梅花藻の開花(7月～8月)に合わせて、川を見ながらのまち歩きが人気です。まち歩きをしながら探してみたいかがでしょうか。

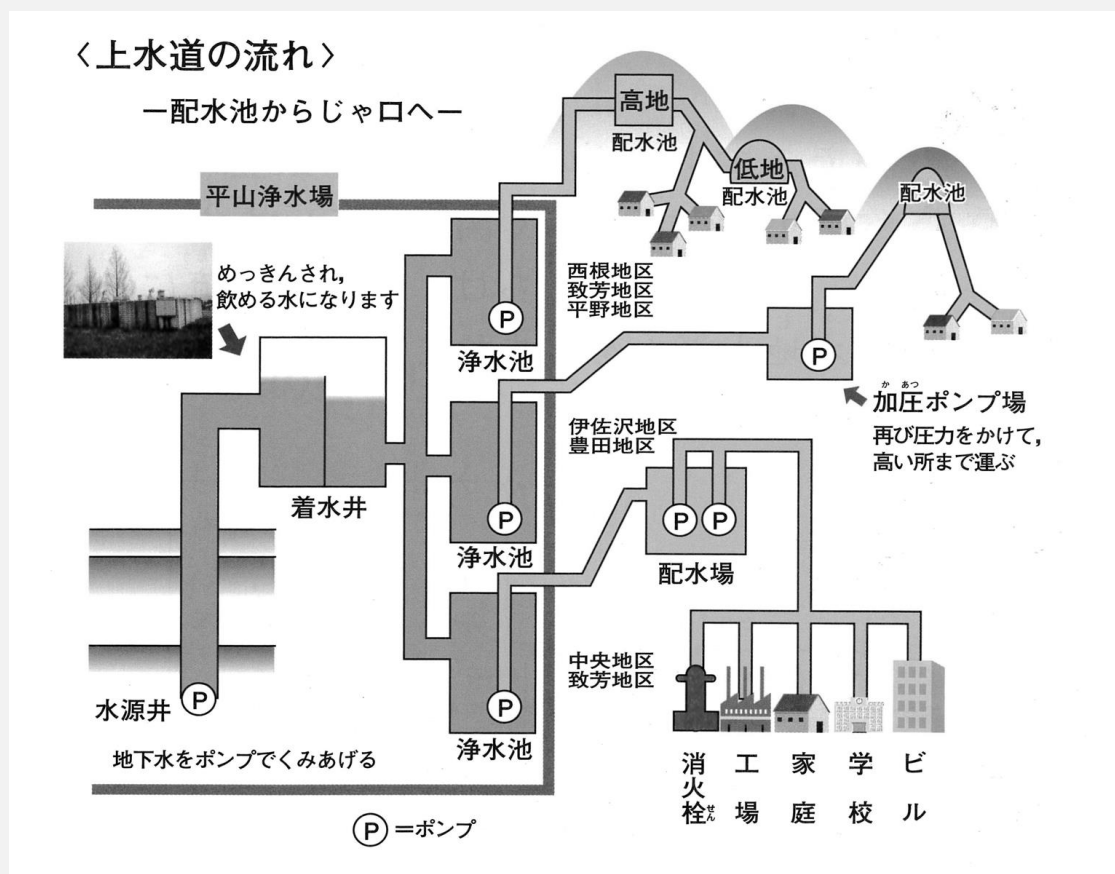


5 おいしい水と生活用水

1 水道水源

朝日連峰の一角をなす平岩山から流れ出た野川は、その急流が運んだ大量の砂礫が下流部に厚く堆積し、扇状地を形成しています。

この扇状地沿いの野川において、数カ所で地下40m以上の深さから汲み上げた地下水を、水道水源として使用しています。水質は極めて良質で、硬度20前後の軟水で県内の水道水の中でも、最も恵まれた水質を誇っています。



2 消流雪用水

消流雪用水路は国のモデル事業として、長井市と旭川市が全国で最初に採択されました。平成12年12月に消流雪用水導入水路の供用を開始し、翌13年11月に消流雪用水導入水路が長井市に移管され、通水が開始されました。

冬期間の消雪利用にとどまらず、年間を通して市街地水路への水量調整等の役割も担っています。

3 野川三堰

野川の水を利用した農業用水の取り入れ口として、昔から三カ所の堰が設けられ、長井と飯豊の水田を潤してきました。

上流より左岸に一の堰(栃の木堰)、右岸側に二の堰(中村堰、荒川堰)と三の堰(木蓮堰)があり、厳しい定めのもとに運用してきました。

また、堰の建設にあたっては、それぞれに逸話が伝えられています。昭和28年の管野ダムと野川第一発電所の完成にともない、三堰合同の統水施設が完成し、現在は野川土地改良区によって運用されています。

6 温泉

1 卯の花温泉はぎ乃湯

野川の左岸に湧出する温泉で、平成17年にボーリングによる温泉掘削で得られたものです。

泉質はナトリウム、塩化物を主とする低張性のアルカリ泉で、加温して卯の花温泉はぎ乃湯として営業しています。

宿泊施設も併設されていますが、日帰り入浴も可能となっています。



2 あやめ温泉ニュー桜湯

朝日連峰の支脈である西山の裾野に位置し、寺泉地内にあります。施設は、長井盆地を一望する場所に建っており、日帰り入浴に利用されています。

ボーリングによる温泉の泉質は、ナトリウムイオンと硫酸イオン、および塩化物イオンを主成分とする弱アルカリ性を示し、源泉温度40.5℃を多少加温して浴用に供しています。



7 山岳

・やまがた百名山について

平成28年、「山に親しむ機会を得て、山の恩恵^{おんけい}に感謝する日」として、8月11日が「山の日」に制定されました。これを契機に、地域の宝である”山“に光を当て、山形県の山に愛着を持つ皆さんから県内の魅力的な山を広く募集し、山岳観光の振興につなげることを目的として「やまがた百名山」が選定されました。

選定された山々の中には、日本百名山に数えられる本格登山者向けの名峰から、地元で愛される里山、気軽に散策・トレッキングができる低山など、多彩な魅力と歴史的背景、暮らしとの関わりが深い100座がそろっています。

長井市からは「祝瓶山^{いわいがめやま}」「置賜葉山^{おきたまはやま}」「熊野山^{くまのやま}」が選ばれており、地元はもちろん県内外からも多くの登山客が訪れています。



1 祝瓶山(1,417m)

野川沿いの山道を進むと、木地山ダムの辺りから祝瓶山の正三角錐^{せいさんかくすい}の山容が見えます。祝瓶山荘までは車で行けますが、山荘からは徒歩になります。角檜吊橋^{かくのらつりばし}を渡り、桑住平^{くわすみだいら}になります。

角檜沢、ヌルミ沢を渡り、二つの沢に挟まれた狭い稜線^{りょうせん}の尾根を登り、視界が開けると、ヌルミ沢源頭のほぼ垂直に見える、壮絶な岩場があり、この断崖^{だんがい}は、朝日連峰三大雪蝕障壁^{せつしよくしょうへき}の一つとなっています。頂上直下は、雪崩に磨かれた岩肌を確かめながら、斜面の横断と急登をして頂上に上がります。

山頂は四方の展望がよく、東北のマッターホルンの名称は積雪期だけではないと実感します。

2 祝瓶山荘^{いわいがめさんそう}

長井駅から約22km、木地山ダム湖までは県道で、その先は林道と造林作業道になります。杉林の中の角檜平に、長井山岳会の祝瓶山荘があります。山荘のすぐそばには、市指定天然記念物のオオヤマザクラもあります。

施錠されているので、利用者は事前に山荘の鍵管理者から鍵を借り、使用後返却します。私営の山小屋ですが、南朝日連峰登山の基地としての役割を果たしています。

3 置賜葉山(1,237m)

標高1,200m前後の葉山一帯は、ゆるやかな傾斜の高原状になっています。長井盆地からは急勾配な葉山東斜面になり、葉山断層崖といえます。

葉山^{さくがみさま}は作神様が祀られ、祖先の霊魂が宿る山、お葉山信仰の山であり、里人には水源の山です。草岡ではおけさ堀、勸進代では嘉永堰^{かえいぜき}・昭和堰など、昔からの水田用水確保の努力がしのべれます。

V字状にえぐられた白兔尾根登山道は深層風化花崗岩帯のため、先人の祈りの踏み跡と雨と雪がさらに踏み跡を深く刻み、葉山参道の特徴を示します。

4 葉山奥の院(1,237.1m)

葉山山荘からお田代湿原を左に進み、標札に従って南東方向に向かうと、小さい独立峰があります。

修験者が祝瓶山や大朝日岳を拜んだとされる場所なので、奥の院と称されています。この地から見ると、祝瓶山の名称の由来が、大朝日の神(朝日権現)を祝ぐ瓶子^{ことぼ}(口が細い壺の一種で、主として酒器として用いられるもの)といわれたのがわかります。

5 葉山山荘

昭和42年、山形県・長井市・白兔財産区で建設しました。以後、葉山山荘は積雪期をはじめ、四季の山岳活動の基地として、多くの山岳人が育ち、市民や学校などの登山活動の普及や自然観察と自然保護活動の拠り所として貢献しています。

常時無人利用、宿泊40名程度、沢水利用、ストーブ有、別棟トイレ、冬季使用可能です。

葉山高原は、朝日山系森林生態系保護地域に含まれています。保護地域には、保存地区と保全利用地区があります。葉山山荘西側のエリアから保全利用地区になり、標識が五葉松に付けられています。

・長井の山々

1 三体山 (1,255.9m)

三体山は季節の到来を示します。初冠雪で冬支度を急かされ、なごり雪が無くなると真夏を知らされます。山に登るには、県道木地山九野本線から前野、桂谷の造林地へ行く吊橋を渡り、林道から三体山に登る踏み跡をたどると、鉦目ななめが登路を示します。樹林の狭い、痩せた尾根で急な登りが続きます。

山頂には、伽羅きやらの老木が豪雪に逆らっているような存在感があります。山頂からわずかに西に降りると、西斜面に西山新道跡を見つけることができます。

2 管野山(神尾山) (661.5m)

長井市内から野川溪谷に眼を移すと、左は熊野山と西の葉山断層崖だんそうがいの南端に(頂上は鴨石かもいし)挟まれて、管野山が頭を持ち上げ、その背景に三体山を含む連山になります。

地形図は神尾山ですが、管野ダム、管野部落がなくなっても管野山が適当です。ながい百秋湖のほぼ全容が眼下に見られます。

6 熊野山 (670m)

中腹に熊野神社があり、平山地区の産土神うぶすなかみとして祀られています。登山路を兼ねた参道の上部が有志により伐採され、野川流域の散居集落と市街地が一望できる景観を満喫できます。

神社周辺、および御神木の大杉に回廊が設置され、御神木を三度回りながら願い事をすれば叶うといわれています。

神社から登路を進むと、片屋根だけの小施設が2カ所あり、ダムと祝瓶山が望めます。

3 平岩山 (1,609m)

長井市の最高標高の山で唯一の磐梯朝日国立公園です。大朝日岳の南東面の基部にあたる平岩山は、平頂ふうしょうちの風衝地で、砂礫の間に高山植物の群生があります。野川源流五貫目沢ごかんめざわの支流、ガッコ沢の先が野川源頭、平岩山となります。

4 合地の峰 (1,283m)

国土地理院の三角点地図では、「三体山」と記載され、一等三角点の補点です。

このあたりでは、一等三角点はここだけで、山頂から見通しが良いためです。

5 八形峰

まばらな林とヤブの登山路が稜線に変わると、八形峰になり、葉山高原が終わり、次の峰が小八形峰です。

名前の由来は、残雪期に野川木流し作業の人たちが、この山の残雪が八の字形に見えたからといわれています。

6 やけの だいら 焼野平 (1, 275m)

原生林帯の中の焼野平は笹ヤブです。風衝地なので、森林が発達できなかったと考えられます。

昭和33年、朝日連峰に至る登山路開設のとき、焼野平の中腹のルートが朝日軍道と一致しており、昔も今も同じ考えの選択だったと気づかされます。

7 あさひ またさわ 大沢峰 (1, 474m)

朝日俣沢と野川源流部をわける稜線に5つのピークがあり楕形尾根といわれ、その主峰が大沢峰です。

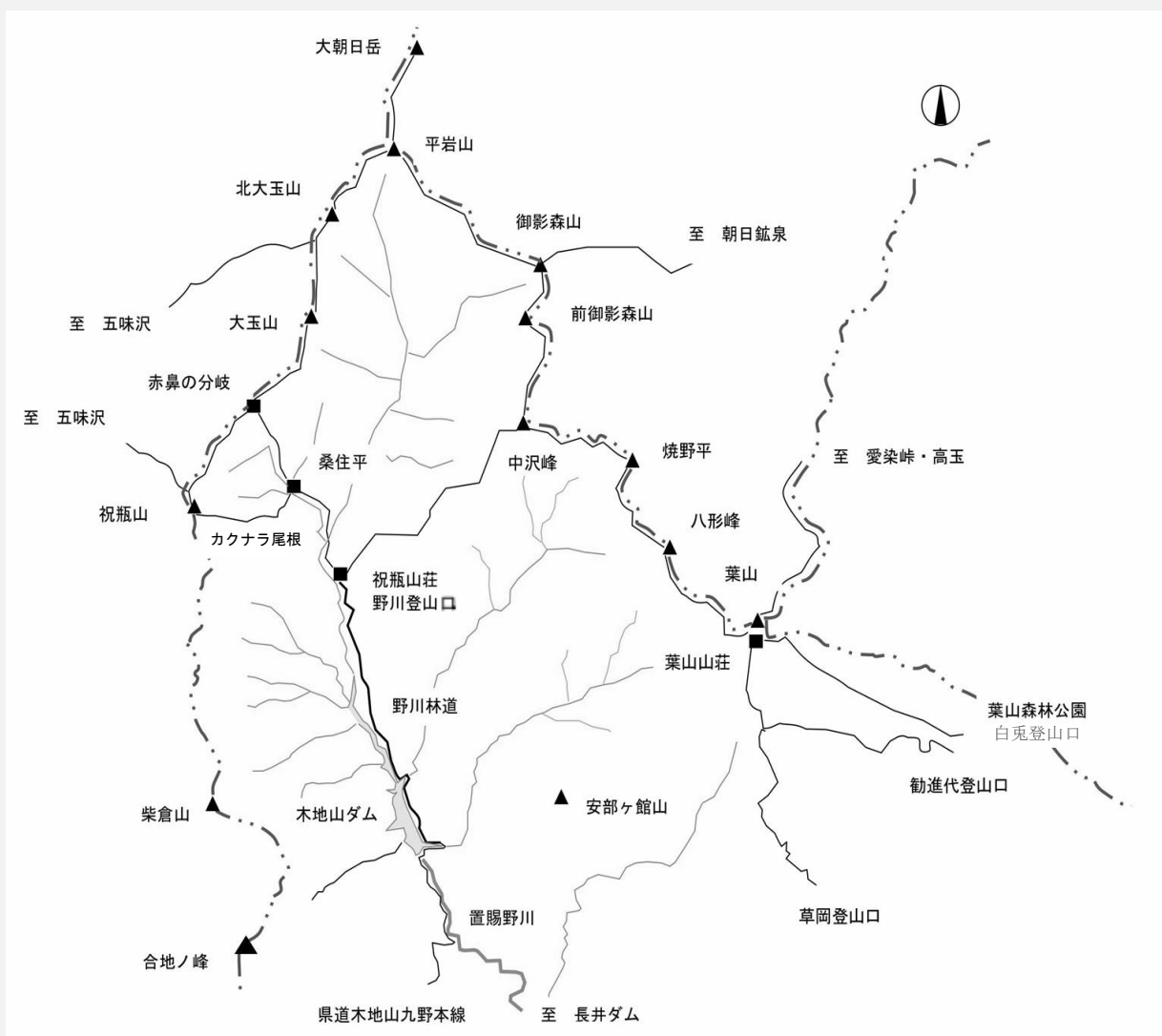
8 なかざわ みね 中沢峰 (1, 343.3m)

焼野平西面のブナ原生林を降りると、最低鞍部の原生林のなかに広場があります。「大留鞍部」という幕营地です。慶長の頃は小屋場として、広くブナが伐採されたと考えられます。

中沢峰の積雪期は祝瓶山、北大玉山東面の雪蝕断崖の景観が楽しめます。

9 みかげ もりやま 御影森山 (1, 539.5m)

白鷹町の北東方面や最上川沿いの国道348号から、西方の山なみの上に白亜の三角錐に見えるのが御影森山です。朝日修験のなごりのためか、明治までは小朝日山とよんでいました。



8 盆地

1 長井盆地

長井盆地は、海拔230～180mに渡って、幅4～6km、長さ約20kmの南北方向に細長く伸び、東西の山地とは断層によって仕切られています。西側は朝日連峰の南西端を形成する、葉山連山が屏風のごとく連なり、地元市民からは「西山」として親しまれています。そして、逆断層型からなる長井盆地西縁断層が走り、その累積運動によって急崖をなす葉山連山と、盆地部の明瞭な境界をなしています。

この葉山連山より、多くの小河川が東方に向かって流下し、扇状地を形成して、最上川本流を盆地の東縁に押しやっています。

2 伊佐沢盆地

伊佐沢は北に高く南に傾斜し、平地は南部に開けた細長い地域で、伊佐沢盆地とよばれます。

9 地質

1 長井の地質

長井の地質は大まかに、長井盆地の東縁を流れる最上川に沿って、ほぼ南北方向に帯状に特徴づけられます。つまり、最上川や白川、野川の現河床を中心に両側に沖積層が分布し、その外側に更新世の段丘堆積層があり、さらに外側の山地部には、基盤である白亜紀の花崗岩類が広がっています。その花崗岩の縁に沿った南部の一部には、新第三系の凝灰岩や頁岩が見られます。

東西の山地を構成する花崗岩とは断層によって区切られ、とくに、西側の長井盆地西縁断層は、逆断層型の累積運動により、第四紀層が厚く堆積しています。

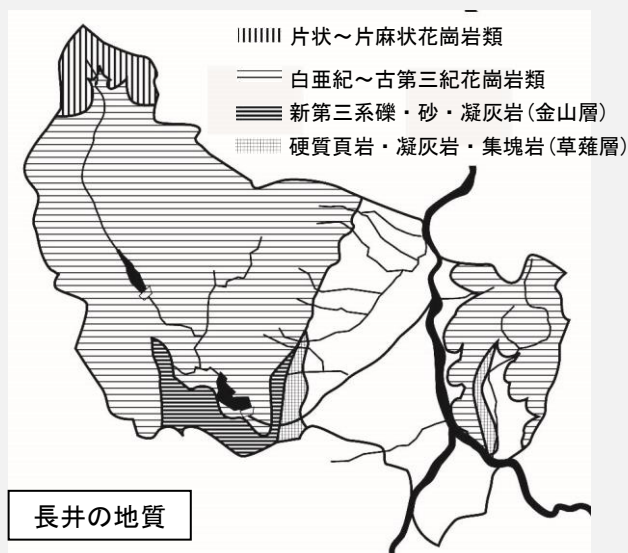
2 洞雲寺の大石

市指定天然記念物

長井盆地の東側山地は、花崗岩体からなる鷹戸屋山山塊からなり、伊佐沢地区のほとんどがこれに含まれます。中央部を流れる逆川に沿って、上伊佐沢の洞雲寺周辺も同様であり、花崗岩の巨石が散在します。とくに、境内にある大石は周囲が



34m、高さが3mを超え、地区名にもなっているほどで、市指定天然記念物に指定されています。



長井の地質

3 長井隕石

大正11年(1922)5月30日午前10時頃、長井市森地区の井上徳助氏(故人)が、農作業の合間に休息をとっている時、目の前の水田に南西方向から大音響とともに落下しました。直ちに、深さ30～40cmの土中から取り出したときは、まだ熱かったといわれています。

鑑定は昭和52年、当時の国立科学博物館村山定男氏によって石質隕石と確認されました。大きさは14×13×10cm、重量は1.81kgで日本の隕石リスト33番目に加えられました。

10 森林・公園

1 不伐の森

「水と緑と花のながい」を提唱する長井市が、地球の財産であり、生命の源である森を守り、後世も緑豊かな地球であることを願い、平成元年に「不伐の森条例」を制定し、20.3haの市有林を永久保存することにした森です。長井市の伊佐沢地区にあり、森の中にある「大石沼」では、夏になるとジュンサイも採れます。不伐の森に親しむ会では、「不伐の森」を守り育てようと、春、夏、



秋、冬にも不伐の森へと足を運べる交流事業を毎年実施しています。

2 21世紀不伐の森

21世紀不伐の森は、元は長井ダム建設工事にともない発生した残土処分地でした。

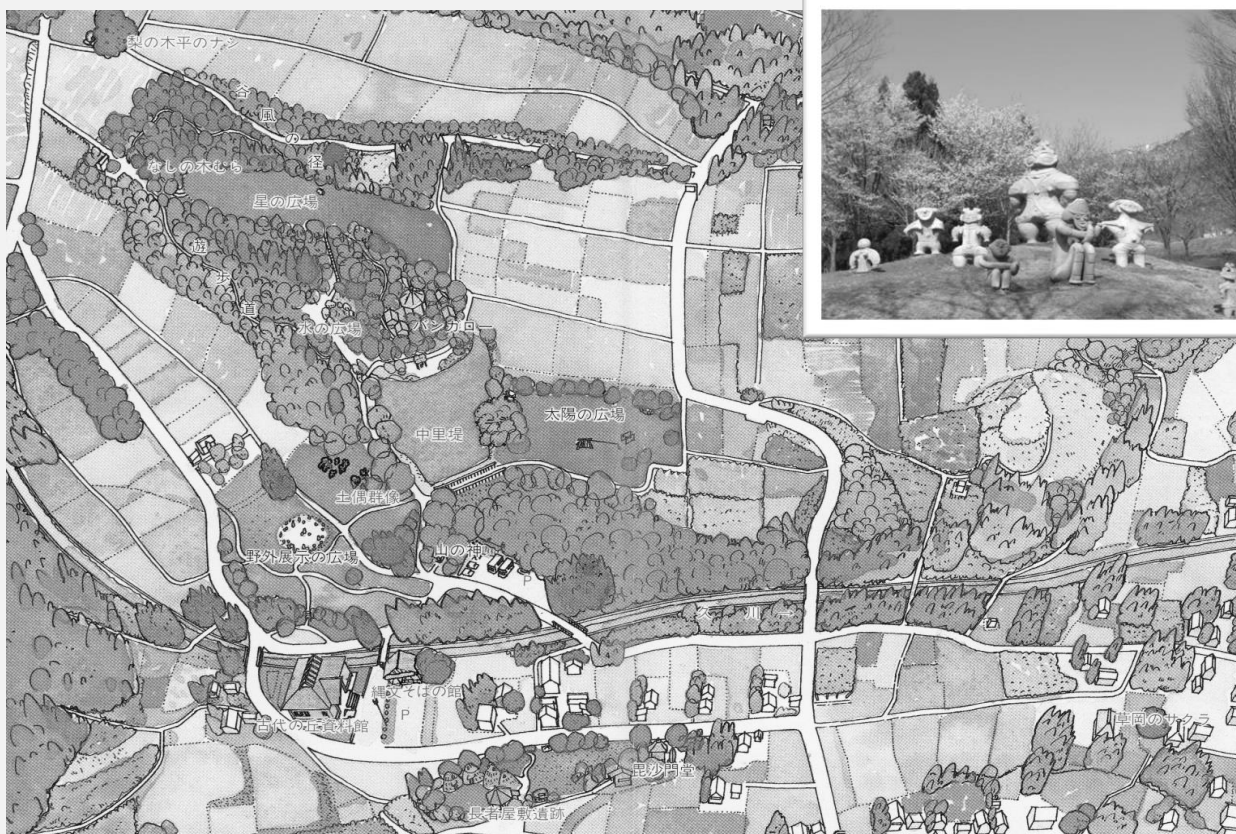
ダム建設工事のために消えた森を、もう一度復活させようという思いを込めて、21世紀不伐の森はつくられました。原石山や残土受入地については、一部のエリアに、市民が育てたブナなどの植樹や苗育成運動を継続的に実施しています。原石山では、沢の付替えを自然に配慮した工法で行い、水辺環境の復



元を図っています。更地が森に戻るには何十年もかかりますが、人の手と自然の力の共同作業でこの場所を森に戻す計画です。

3 古代の丘

長井市草岡地区にある古代の丘は、朝日山系の麓に位置し、周辺では旧石器時代から戦国時代に至るまで数多くの遺跡が見つかっています。体験施設や野外展示施設をはじめ、古代の丘資料館など、ここには、縄文時代の雰囲気漂っています。自然溢れる場所で、マイナスイオンがいっぱいなので散策に最適です。



4 葉山森林公園

昭和63年、長井市地域活性化事業の第1号の指定を受け、平成2年に白兔地区民が一丸となつてつくり上げた公園です。象徴となるバンガローは、「兎夢創観」と命名され、地区民のボランティアで維持管理に努め、平成11年より14年にかけて、山形県的生活環境保全事業によりさらに広範囲の公園として整備され、平成21年、山形県みどり環境公募事業の認定を受けました。緑豊かな杉林に囲まれた林間キャンプ場で、脇を



流れる小川では水遊びができます。朝日、飯豊、蔵王、吾妻の見晴らしが良く、秋の紅葉は絶景です。

5 八ヶ森公園

豊田今泉地区にある今泉山は、通称「八ヶ森」とよばれ、北八ヶ森と南八ヶ森からなる周囲の山々を眺望できる景勝地で、「八ヶ森自然公園」として、長井市民の憩いの場となっています。

八ヶ森の由来は、平安時代後期の安倍貞任と源義家（八幡太郎義家）の合戦に関する伝説があることにちなみ、



「八ヶ森」とよばれています。自然環境が豊かで、歴史を彷彿させる地となっています。

11 樹木銘木

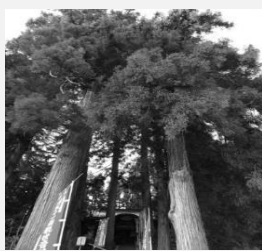
1 総宮神社の直江杉



直江杉は横町の総宮神社にあります。慶長3年（1598）、直江兼続が植えたといわれています。幹廻り約3～4m、高さ約25～30mで9本あります。東西に一文字に見えることから「宮の一文字杉」ともよばれ、最上川舟運の船頭たちの目印となりました。

2 芦沢観音のスギ

市指定天然記念物



芦沢地内の曹洞宗雲洞庵の参道にある1本の杉で、高さは43mもあり、市指定の天然記念物の中でも1番背の高い巨木です。樹齢は定かではありませんが、下

から見上げると実に見事な杉で、その樹姿の荘厳さに圧倒されます。長い年月にわたって観音様とともに、地元の人たちの安全と幸せを見守ってきました。

3 蘊安神社のスギ

市指定天然記念物

五十川地内の蘊安神社の正面右側の杉が、市天然記念物に指定されています。高さは30mほどですが、市内にある門杉の中では1番太く、根元で11.55m、幹廻り10.50mもあります。樹齢は推定600年といわれています。毎年9月の祭礼の際は、太くどっしりとした大木のある境内では近年久しぶりに復活した五十川獅子踊が奉納されています。



4 岩切不動の門スギ

市指定天然記念物

2本の門杉の樹齢は定かではありませんが、高さは、およそ28mあります。東側の杉は、幹回り4m、西側の杉は幹廻り5.08mもあり、不動尊の門杉らしく、強さと逞しさを感じます。伊達輝宗（1544～1585）の頃、不動尊を現在の場所に移した時に、門杉として植えられたと伝えられています。



5 遍照寺の大イチョウ

市指定天然記念物

高さ23m、根元が8.25m、幹廻り6.49mもあるこの銀杏の大木は、遍照寺中興の祖といわれる宍日上人が、手植えしたと言伝えられています。

根元から約8mの所で樹幹を大きく5分岐しており、太い枝の基部から古木にできる「乳」(気根)がみられます。雌株で樹齢は約600年とされています。



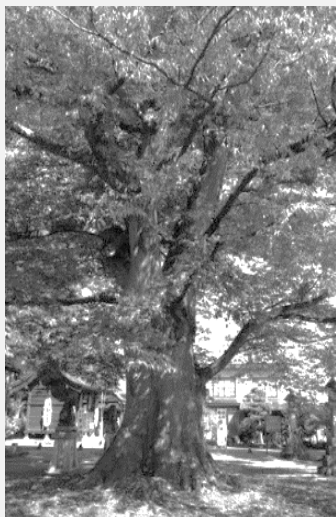
6 白山神社の大ケヤキ

市指定天然記念物

この櫟は鎌倉時代初期に、地頭がこの地に館を構え、やがて、集落ができた頃に植えられたといわれています。

地上4mのあたりから3枝に分かれ、幹廻りは6.25m、高さは16mあります。

樹齢は750年。白山神社の御神木にふさわしく、姿、形はもちろんのこと、堂々として重みと風格がただよっています。



7 上伊佐沢のブナ

市指定天然記念物

ブナは山地に生育するのが普通ですが、低山地で高さ24mもある巨樹のブナは珍しいといわれています。自然木で、根元は4.40m、幹廻りは3.10m、そして、枝張は東西17.50mもあります。

樹勢も盛んで、新緑の時節はまぶしく、紅葉の時期もまた見事なものです。

8 梨木平のナシ

市指定天然記念物

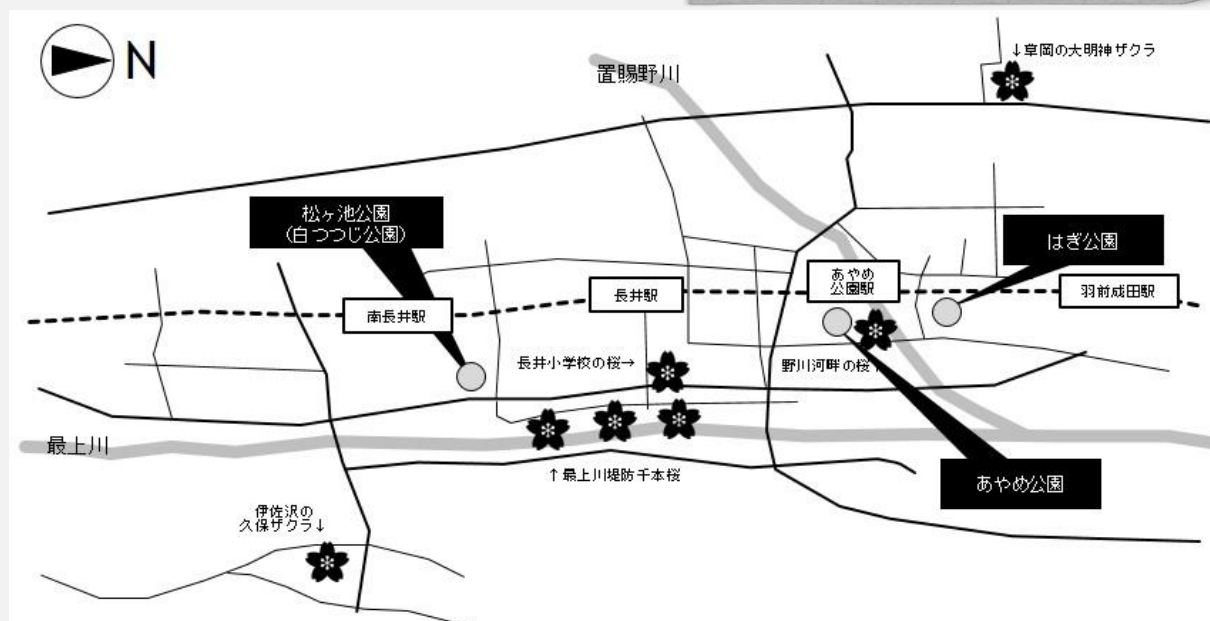
草岡地内の梨木平の原野にあり、いつからここにあるかは定かではありません。山形県を代表する梨の原種(岩手山梨という品種)で、高さは13mほどあります。

秋には、たわわに実った梨が谷風に揺れている光景が見られます。結城哀草果の歌碑「高原に枝ひろげたる山梨の独立樹ありて鳥らあつまる」があります。



12 花の長井

公園と桜の地図



あやめ公園

明治43年に長井市横町の金田勝見^{かねだかつみ}という人物が、伐採した杉林の跡地に湧く、湧水の周りに数十株の花菖蒲^{はなしょうぶ}を植え、傍らに茶店を開いたのが現在の公園の始まりです。

あやめは、「水と緑と花のまち」長井市のシンボルになっています。あやめ公園は、令和2年で開園110周年を迎えました。3.3haの園内には、500種、100万本の「あやめ」が鮮やかな彩りを見せてくれます。

また、数や種類もさることながら、「長井古種」とよばれる希少な原種に近い、固有の品種が見どころのひとつになっています。



1 「山形県一名所」最高当選記念碑

昭和5年、山形新聞が主催して「山形県一名所」人気投票を行いました。町民の熱烈な運動が実って、投票で第一位の栄誉をつかみました。それを記念して建てられた碑です。戦前のあやめ公園の、繁栄を築きあげるきっかけになった大切な碑です。

2 蒲生直英詩碑^{がもうなおえい}

郷土長井の詩人、蒲生直英の詩集「四季流転」の巻頭の詩です。

緑の里

山は連なり 川は流れる
緑の里に 花は咲き
町には幸せが 優しく佇んでいる

3 開園記念川柳句碑

この碑は、昭和12年7月11日に町内有志からの寄付で建てられました。「開園記念」の揮ごうは、長井第一高等学校・長井高等学校で長年教鞭をとり校長を務めた俳人、佐藤柊坡です。

明治43年7月、川のほとりに数十株のあやめを咲かせ、川柳^{ぎん}を吟じた茶店の主人の金田勝見という川柳人がいました。以来、あやめの咲く時期に川柳大会を開いていたそうです。

名園の 花を生かして 絵雪洞 (白河 五花村)
人去りて 地にむらさきの 詩が残り (東京 剣花坊)
魂は ゆかりの色へ よみがへり (東京 飴ン坊)

4 あやめと花菖蒲、かきつばたの違い

	あやめ	花菖蒲	カキツバタ
花の特徴	小輪咲 花弁の中心の核が網の目模様	大輪咲 野生種は小輪 花弁の中心が黄色	中輪咲 花弁の中心が淡い黄色か白色
花の位置	葉より高い	葉より高い	葉より低い
葉の特徴	幅が狭く濃い緑色 主脈は不明瞭	幅は中程度 主脈が太い	幅が広く黄緑色か緑色 主脈は細小
適地	乾燥地	湿地または乾燥地	湿地
開花期	5月下旬～6月下旬	6月中旬～7月上旬	5月下旬～6月上旬

5 長井古種

花菖蒲は、ノハナショウブを観賞用に改良した園芸種ですが、長井古種は原種に近いといわれ、江戸中期の花菖蒲の姿を今に伝える希少性が高い存在です。現在34種が「長井古種」として大切に育てられています。うち、次の13種が平成2年6月に市の天然記念物に指定されました。



1 朝日の峰



2 郭公鳥



3 小桜姫



4 日月



5 爪紅



6 出羽娘



7 長井小町



8 長井小紫



9 野川の鷺



10 三淵の流



11 藍島



12 竜の髭



13 麗人

※「長井古種」13種の読み

1. あさひのみね 2. かっこうどり 3. こざくらひめ 4. じつげつ 5. つまべに
6. でわむすめ 7. ながいこまち 8. ながいこむらさき 9. のがわのさぎ
10. みふちのながれ 11. らんじま 12. りゅうのひげ 13. れいじん

白つつじ公園（松ヶ池公園）

白つつじ公園は毎年5月になると、5.6haの園内に、約3,000株のつつじが咲き誇ります。「水と緑と花」の公園には、大噴水、滝、松ヶ池とひょうたん池を結ぶせせらぎ、子供向けの遊具があり、市民と観光客の憩いの場として愛されています。

公園には、白一色のつつじだけが植栽され、「七兵衛ツツジ」とよばれる樹齢約750年の古木群もあります。



1 つつじ公園のはじまり

長井町の発展と産業振興に功績を残した横山孫助は、明治29年、小出の地に名所をつくろうと、皇大神社がある小出公園に、古くから有名な「七兵衛ツツジ」を中央に置き季節の草木花や風流を楽しめる場や子供の遊び場、神仏を崇敬する場としての公園づくりを手掛けました。

その後、園内には長井市生まれの俳人「川崎玄子」の句碑や「中山きりを」の歌碑、南画家「菅原白龍」の記念碑が建立され、公園づくりに尽力した長井町名誉町民「横山孫助」の胸像も、当時の長井町役場（ままの上地区）の東から七兵衛ツツジのそばへと移転されました。



2 七兵衛ツツジ

白つつじ公園中央部の古木群、27株が長井市天然記念物に指定されています。いずれも琉球種で、それぞれ、樹高は1m以上、根元周は0.35m以上、枝張は東西で1m以上、株立ち数は2本以上あります。

天明3年(1783)の飢饉^{ききん}のとき、現在の花作町の豪農鈴木七兵衛が、飢饉の救済事業として白つつじの築山を造らせました。やがて、明治29年に町民の憩いの場所として、松ヶ池公園の建設、整備拡充が行われましたが、その際、二度にわたりこの白つつじを譲り受けました。それが白つつじ公園のもとになったのです。



はぎ公園

はぎ公園はあやめ公園の外苑といわれ、昭和4年に安部林蔵氏が曙園と命名し開園しました。あやめ公園の北、野川左岸にある、約0.6haの日本庭園風の静かな公園です。8月下旬から9月にかけて紫やピンク、白などのたおやかなはぎの花に包まれ、風情を楽しめます。

モミジやバラも彩りを加え、四季を通じて竹、杉、檜といった樹木が訪れる人々を魅了します。



13 桜

1 伊佐沢の久保ザクラ

国指定天然記念物

上伊佐沢地内にあるエドヒガンの古木で、樹齢は坂上田村麻呂さかのうえの たむら まろの伝説によると約1,200年、桑島将監の言い伝えでは約450年余りと推定されます。

根元の部分が腐朽し樹勢が衰えたため、主幹が南側と北側に大きく2つに分岐した姿になっています。市、地域が一体となって、専門家の指導を受けながら、土壌の入れ替えや支柱の設置など、樹勢回復の処置が計画的に行われています。昭和25年（旧法大正13年）に国の天然記念物に指定されています。

毎年4月第3土曜日には隣接する伊佐沢小学校グラウンドで「伊佐沢念仏踊」が披露されます。



2 草岡の大明神ザクラ

国指定天然記念物

草岡地内の個人宅にあるエドヒガンの古木で、樹齢は坂上田村麻呂の伝説によると約1,200年、伊達政宗の伝説では約450年余りと推定されます。

地元では、古くから「種まき桜」として春の農作業の目安とされてきた桜です。古木のエドヒガンであるため、地域一丸となって施肥や消毒など、さまざまな樹勢回復のための処置が施されています。平成17年に国の天然記念物に指定されています。



3 最上川堤防千本桜

もがみがわていほうせんぼんざくら

大正4年(1915)に大正天皇御即位を記念して、長井大橋(現在のさくら大橋)と長井橋の間約2kmの右岸堤防に植えられ、昭和13～15年には左岸にも広がり、両岸が桜で彩られました。

当時はソメイヨシノを300本植え、「千本桜」や「土手の桜」として親しまれてきました。春には二百数十本が見事な桜並木となります。



4 野川河畔の桜

昭和20年代から30年代にかけて、野川の谷地橋付近から旧成田橋付近までの右岸に植えられた100本を超えるソメイヨシノです。

その途中にはフラワー長井線の鉄橋やあやめ公園があり、西山の残雪とともに美しさを際立たせています。

5 長井小学校の桜

現在の旧第一校舎は、昭和8年に建てられました。桜は当時の皇太子殿下（現 明仁上皇陛下）誕生を記念して昭和9年に敷地の周囲に植えられたものです。樹齢は約80年にもなるソメイヨシノです。とくに、正門脇の桜は、「旧教育委員会庁舎前の桜」とともに、市内でも1番先に見ごろを迎えます。

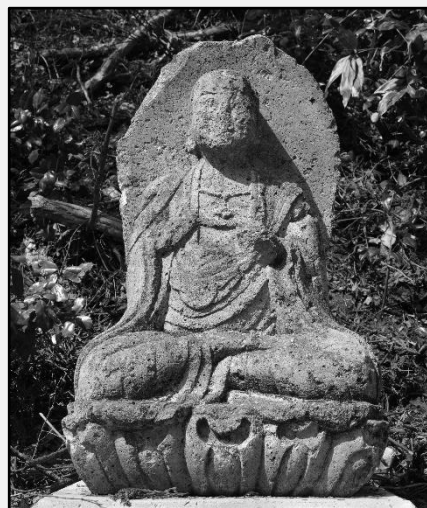
14 流し木

野川山の流し木^{ながしき}の歴史は古く、江戸時代にはすでに始まっており、以後、昭和 28 年頃まで行われていましたが、伝統的な流木作業も管野ダム着工とともになくなりました。当時野川から木蓮川を利用して木を流し「小出木場^{こいできば}」と「宮町木場^{みやまちきば}」で水揚げされており、その大部分は、酒屋や醤油屋、製ろう場に引き取られていたといわれています。

危険で苦勞が多く大変な流し木は、まだ雪の深い春彼岸に奥山に入り、泊りがけで木を伐りだしたあと、かた雪を利用して少しでも沢の近くに「まくり落とす」という作業を繰り返し、日当たりのよい平地で乾燥させました。乾燥した木々を出すには、その年の初冬、水をせき止める「半筒^{はんどう}」(＝小型のダム)という仕掛けを沢の所々につくり、貯めた大量の水と共に一気に沢から本流(野川)に流し出すという巧妙で豪快なものだったと伝えられています。



流し木置き場（沢の近くの平地）
昭和 28 年（1953）頃撮影



流し木作業の安全を祈念した地藏
明治 37 年（1905）建立

15 文化的景観

1 「文化的景観」とは

・「文化的景観」と「重要文化的景観」

文化的景観とは文化財のカテゴリの一つで、文化財保護法では「地域における人々の生活または生業^{せいぎょう}の理解のために欠くことのできないもの」と定められています。この地域の風土と生業の特色を示すものであり、人々の暮らしと自然が折り重なって作られた景観のことを指しています。なかでも、地域の特色を示す代表的なものや他に例を見ない独特なものとして国が選定したものを「重要文化的景観」とし、令和元年10月現在、全国で65件が選定を受けています。

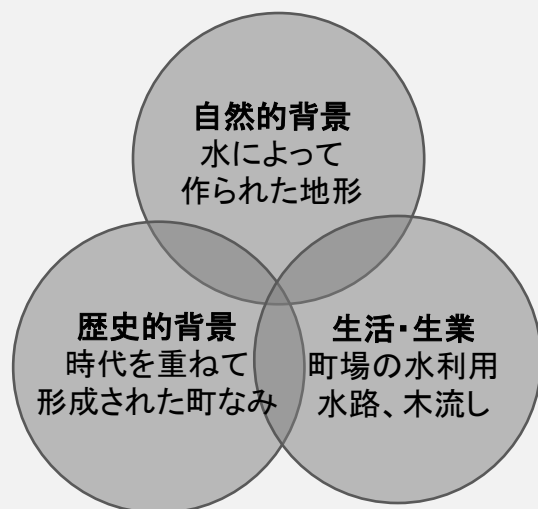
長井市では平成23年度に調査検討委員会を立ち上げ、「自然条件」「歴史背景」「生活・生業」の視点に基づき調査を実施し、平成30年2月に「最上川上流域における長井の町場景観」として選定されました。

2 長井の文化的景観

長井市は市域の3分の2が山地であり、市街地は南北を野川と白川に挟まれた最上川沿いに展開しています。

現在の市街地・長井の町場は、中世にさかのぼると宮と小出という二つの核を持ち、近世には最上川舟運によって大きく発展しました。近代に入ると鉄道や道路整備による交通の発達に応じてまちの姿が変化し、宮と小出が一体となった現代の“長井”が形作られました。

現在の長井は、各時代のまちの姿を継承しつつ時代に沿った変化を経て形成された様子と、水とともに暮らす様子が折り重なり形作られたものと言えます。



3 水とともに暮らす風景

長井のまちなかにはたくさんの河川や水路が流れています。立体交差する大樋川と野呂川、家と家の間を流れる細かい水路などは、水を引くためだけではなく、水を分け被害を避けるためであったとも言われています。

また、屋敷へ水を引く「入り水^{いみず}」や「入れかわど」、水を使うための段差「かわど」が今でも残っています。冬期間でも水が流れる水路が多いことから消雪にも利用されています。

4 時代の重なる町場

中世以前から存在する宮と小出は、それぞれ政治的な拠点である館や寺社が置かれ、在郷町として発展しました。

近世になると、新潟や庄内、出羽三山などへ向かう街道が交差する陸上交通の要衝となり最上川舟運開通によって物資の集積地・商業地として栄えました。

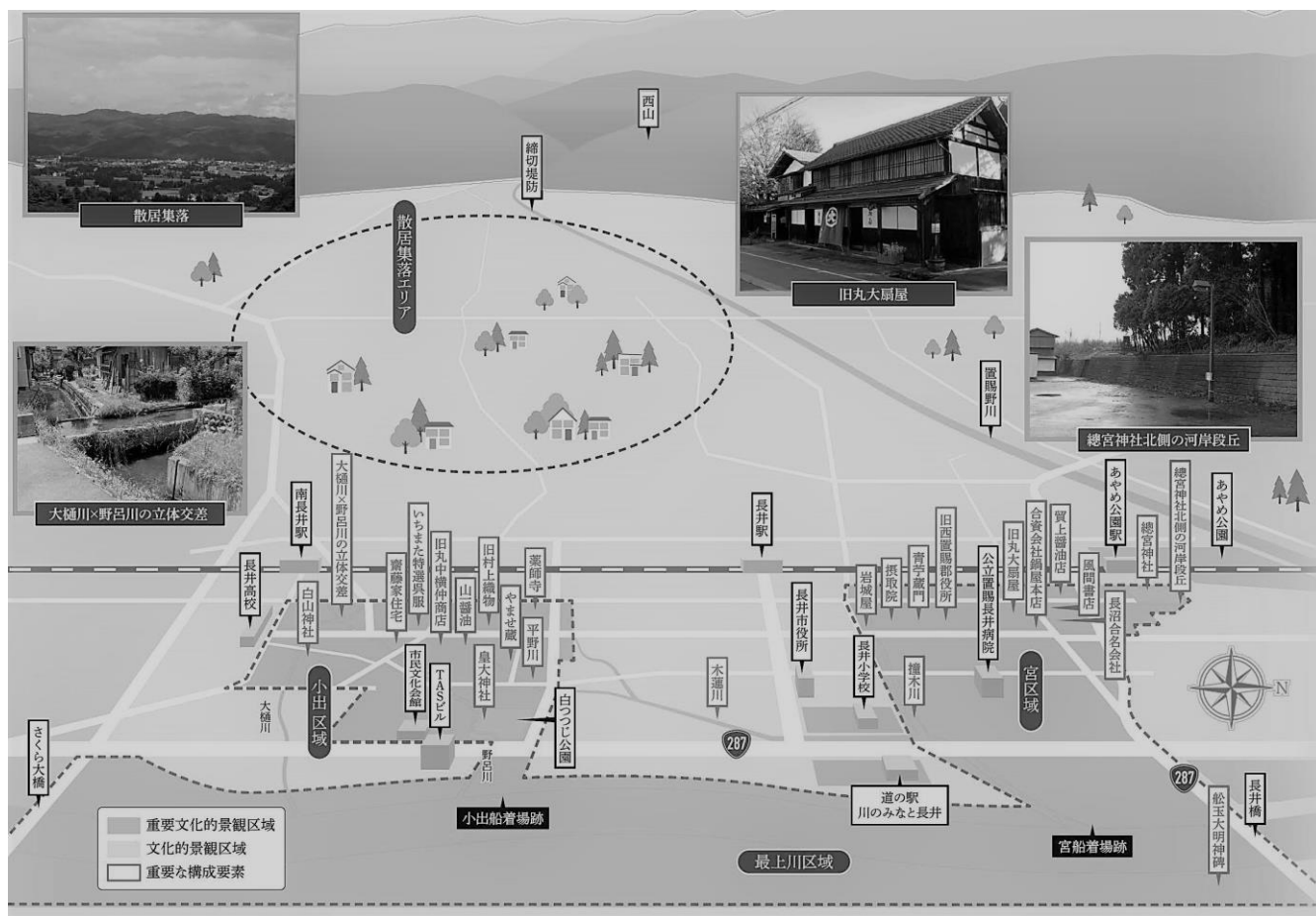
近代には長井軽便鉄道が開通し、宮村と小出村の間である境町に長井駅が設置され、一つの町場となりました。

それぞれの時代で発展してきた長井の町場には、その時代の様子を今に伝える多彩な建造物が残っています。

5 町場の発展

町場の発展を今に伝えるのは、江戸時代から続く通り沿いに並ぶ商家群です。質素倹約を重んじた時代にあり、きらびやかなものは数少ないものの、堅強なクリやケヤキの木材や上等な高畠石など、贅沢な材を使い建てられた店や蔵が舟運時代の繁栄を今に伝えています。

そして、江戸時代から引き継ぐ、通りに面して店～母屋～蔵など奥行きのある敷地に水を引く土地利用の形を今も見ることができます。



「あやめ Repo_vol.44(2017年12月号)の図より」

3 未来へどう伝える？

「文化的景観」とは、「自然」に「人」が関与し形作られた景観です。時代ごとに様々な要素が縦糸と横糸となって折り重なり、現代の私たちが暮らす長井の町場が作られてきました。これまでの長井の町がそうであったように、まちは時代に合わせて求められる機能が変わり、変化していきます。この景観を未来に引き継いでいくために、どう保存し活用していくのかが問われています。